

荒川にまつわる石碑

～荒川と人が共存してきた歴史の語り部～

荒川流域には様々な石碑が建てられ、それぞれ色々な意味が込められています。

(築堤の碑、災害記念の碑、治水・利水関係顕徳碑、用水・記念碑、堰・水門の碑、治水記念碑、名勝等)



道場橋の近くに建てられている「大川堤の碑」。地元出身の実業家の思いが実現

大川堤の碑

この地域は昔、大雨が降ると河川が氾濫するほど低い土地で、たびたび水害に見舞われていました。こうした水害から村を守るために、横沼出身の製紙王・大川平三郎は私財を投じて堤防を築かせました。この堤防が、のちに「大川堤」と呼ばれるようになり、この碑から南に1150mのところにありました。

大川平三郎は、1860（万延元）年生まれ。13歳のときに叔父である実業家・渋沢栄一を頼り上京、渋沢の書生になりました。同1875（明治8）年に渋沢が設立した王子の抄紙会社に入社。のちにアメリカに留学し、帰国後、製紙法の発明改良に成功しました。1920（大正9）年、武州銀行が設立されると頭取に迎えられ、金融事業を通じ埼玉県経済発展に尽力。また1925（大正14）年には、私財を投じて、財団法人大川育英会を設立、埼玉県出身の学生に学費を提供しました。

旧熊谷堤

久下権八公園の碑は時間の経過で碑文が読みづらくなっていますが、伊藤博文篆額（てんがく：石碑の上部に篆書で書かれた題字）とありますので「熊谷堤」の題字を書かれたようです。

要約すると、旧熊谷堤が1854（安政元）年に久下と石原の間で決壊。1875（明治8）年3月に起工し、1879（明治12）年3月に完成。長さ6万3千6百余尺、高さ2丈とあります。



久下権八公園にある旧熊谷堤碑

▶ 寛保洪水位標

奥貴友山翁の著書『出水川々の覚』に「水勢完りて私宅えんの上一尺二寸也 地上四尺餘小家は軒をひたし候少長共に梁上にまたがり梁まで水つきたるは屋根をやぶり」と、また「氷川明神の石灯籠の足へ水の深さを記置也」とあるのをもとに、奥貴家縁側及び氷川社石灯籠を典拠に、川越市教育委員会の実測により、1742（寛保2）年大水の洪水位は標高9米50cmであり、また、氷川社境内富士講山の頂上がこれにあたと推定しました。

寛保洪水位標は、これを永く後世に伝えるための記念碑として建立されています。



かんぽこうすい
寛保洪水位標

▶ 村民の願いがかない架けられた橋

武川村と本畠村（合併により、いずれも現在は川本町を経て深谷市）の間に架けられ交通の要衝であった植松橋を木造の橋から永久橋（コンクリート橋）にしようと、両村民は埼玉県および内務省に何度も陳情書を提出した結果、その必要性を認められました。しかし、いくつかの事件や戦争といった障害に阻まれ、何度も計画が中止されました。

第2次大戦後も両村民は努力を続けた結果、1949（昭和24）年に災害復旧費400万円が認められ、総額1000万円の予算で日本初の鉄筋コンクリート流線型の冠水橋が設計されました。延べ9000人を要して建設し、同1951（昭和26）年4月、全長133m、幅3.6mの冠水橋が完成。この冠水橋の架設を記念して建てられたのがこの石碑で、植松橋の近くにあります。

冠水橋とは、橋桁が低い位置に設けられ、洪水になると水没し、通行不能になってしまう橋。欄干のないコンクリート橋が主流なので、全国的に現在では減りつつあります。



村民の熱心な陳情で永久橋架設を実現。現在の植松橋は1971（昭和46）年に完成しました。

アクセス

大川堤の碑

交通：東武東上線「若葉駅」より、坂戸市内循環バス東コース「三芳野農協前」下車、徒歩約20分

住所：埼玉県坂戸市 横沼・道場橋近く



大川堤の碑

熊谷堤の碑（久下権八公園）

交通：JR高崎線、秩父本線「熊谷駅」より、熊谷市ゆうゆうバス「上之庄」行き「上久下」下車、徒歩2分

住所：埼玉県熊谷市 久下2342-8



熊谷堤の碑